

義和団運動100周年国際学術討論会を見る「まなざし」

(神田外語大学講師) 久保田 善丈

I. はじめに

こんな話があったそうだ。中国内陸部のある貧困地域では小学校の老朽化が問題となっており、そして、その地域の支援をすすめていたNGOを通じて、小学校建て替えについての経済的援助を申し入れる団体があった。この団体は援助決定に先だって現地視察を行うことになり、それにとともに現地では精一杯のもてなしを準備する。近隣の子供たちは楽団を組み、綺麗な服を着て視察団を迎えた。そして、このことが援助中止の危機を招くのである。「もてなし」は視察団が求めたイメージにそぐわなかったのだ。このことは援助の主体がその客体に対して、援助成立にふさわしい貧困のステレオタイプを求めていることを意味する。それはさしずめこんなところだろうか。「ほろをまとった裸足の子供たち。でもその瞳はきらきらと輝いていて、それは日本人が失ってしまった何かを象徴している。そして彼等はまぎれもなく我々の力を必要としている——」こうして初めて援助が成立することになり、それは例えばニュースとなって人々のステレオタイプをさらに強化することになるのである。そうであれば、そこでは常に援助の主体による、すなわち、「まなざす」主体による対象イメージの閉じこめが行われることになるのである。以下、このような問題を念頭に置きながら、学会の模様を紹介していくことになる。我々はまさに「義和団運動100周年国際学術討論会」とそれを通じて浮かび上がる中国の状況を「まなざそう」としているからである。

II. 設定と「大会中心発言」の発想

山東大学を中心とした義和団運動についての国際学術討論会は、1980年以来10年毎に開催されており、したがって今回は第3回の討論会ということになる。日程は2000年10月9～12日、このうち12日は河北省威県での学術視察にあてられていた。威県での学術視察は前回も行われており、私も含め、前回の参加者たちは10年ぶりに見る威県をととても楽しみにしていた。この件については後述するとして、今回の設定に戻りたい。主催は山東大学、他に中国史学会、中国義和団研究会、山東師範大学、山東省社会科学連合会、山東省社会科学院、山東省歴史学会、『近代史研究』編集部、河北省威県人民政府が共催者として名を連ねる。参加者は「会議手冊」によれば157人、うち外国人研究者は27人であった。また、提出論文は100本を大きく上回り、90年の会議にも論文を提出している研究者の30%強が今回も報告者として参加していた⁽¹⁾。

討論会の全体テーマは「義和団運動与近代中国与世界」であった。全体テーマについては、前回、前々回と比較した場合、その限らない広がりを目を引く。1980年「義和団運動史」、1990年「義和団運動与近代中国社会」、そして、今回については上述の通りである。このテーマの拡大が何を意味するのか。中国社会の変容に伴う関心の多様化、史料制約の緩和といった事柄と結びつけることはあり得るが、この問題については個々の報告を取り上げることで対応することになるだろう。ここでは中国歴史学界全体の趨勢がかいま見られる事例を一つだけ取り上げることにする。

中国人民大学学長であると同時に中国史学会副会長であり、そして、大勢のマスコミ関係者を前にした李文海は、実質的な討論会に先立って「大会中心発言」を行った（「中国這樣走進20世紀～義和団運動後の中国政局」）。彼はまず19世紀末の三大事件として日清戦争、戊戌変法、義和団運動を取り上げ、そこに見られる共通点と、それらがその後に残した結果について論じる。共通点はそれぞれが「民族危機」の深刻化、「救亡意識」の強まり、「民族覚醒」の進展を促したことであり、結果として「新政」の展開、「立憲派」「革命派」登場の契機となった——。そして彼は、この現象をどのように評価するのかという課題を設定するのである。もちろんこの議論自体に何ら新鮮さを感じることはできない。ただ、彼が示した次の見解は、中国における歴史学界の現状を考えるにあたって興味深い。彼は「革命派」と「立憲派」についてこのように述べるのである。「高低、優劣、是非ははっきりしているが重要なのは何れが当時の社会の需要に適應していたかということだ」。ここで彼が「高低、優劣、是非……」というとき、そこで前提とされる発想が史的唯物論的發展論とそれを支える政治的価値に裏打ちされていることはいうまでもないだろう。一方で「重要なのは……」というときの発想は近年の方法論的、社会的な価値の多様化、価値相対主義的発想を前提とするものと考えられる。つまり、彼の発したこの一言には、二つの全く異なる価値観が並んで存在しているのだ。そうであれば研究者は「優劣、是非」がはっきりしている中

〈表1〉

〈1990年個別テーマ〉	〈2000年個別テーマ〉
①「義和団運動評価」	①「義和団運動的社会文化、背景」
②「義和団運動的社会文化、背景」	②「義和団運動与教会、教案」
③「義和団運動与秘密結社」	③「義和団運動的發展与清政府」
④「義和団運動与西方在华教会、教案」	④「義和団運動与世界」
⑤「義和団運動与国内政治」	⑤「義和団運動与中国近代社会」
⑥「義和団運動与世界」	⑥「義和団運動的評価」

中国歴史学界の現状も示唆されていると考えられるのである。そして、こういった方向性は文革後現在に至る中国のアンビヴァレントなありかたを象徴したものといえることができる。

Ⅲ. 中国側研究動向

(1) 「評価論」と「源流考」

全体テーマについてはすでに触れたが、ここではまずどのような個別テーマが設置されたのかということを1990年との対比で示しておこう（表）。見ての通り基本的な設定は変わっていない。ただ、この設定内部での重心は移動しており、この点については触れておかなければならない。

中国における政治的価値と学問的方向性の関係を象徴するのが義和団「評価論」であろう。そして、80年の討論会で隆盛を極め、90年にも盛んだったこの「評価論」は今回明らかに低調だった。「評価論」のために分会も設けられているし、そこに分類された論文は一定の数字を示すが、そういったこととは別に、これについては議論のテンションの問題として考えたい。例えば80年の討論会をレポートしたいくつかの文章⁽²⁾に描かれる「熱気」はもはや存在しないということだ。70年代末以降急激な価値の転換にともなって必然的に登場した議論が「評価論」であることをふまれば、これも当然の帰結と考えるべきだろう。もちろん「評価論」が消えたのではない。それは「二つの価値の併存」という発想の中に潜在しており、時として前面に現れることになるのである。

同様にかつて非常に盛んだったいわゆる「源流考」にも目を配っておきたい。「源流考」については次のような指摘がある⁽³⁾。中国の義和団研究においては社会経済史的研究が著しく不足している。また、農民と農村については克服されるべき存在という位置づけが予めなされており、したがって農民論は必要がないということになる。とすれば義和団運動を理解するためには「源流」を突き止めるほかに、こうして「秘密結社」と義和団の関わりが広く取り上げられることになる——。そして、今回、個別テーマのタイトルから「秘密結社」は落ちている。参加者に配られた報告サマリー集（「会議手冊」）を見るとそれは上に示した〈表〉2000年①「義和団運動的社会文化、背景」に吸収されたことが分かるのだが、このことについては、義和団を理解する手段としての「秘密結社」研究は方法論的多様化の中で求心力を失いつつあると理解することができるだろう。例えば、今回義和団研究の方法論そのものを扱った報告が見られることはそれを象徴しているといえる⁽⁴⁾。

要するに、80年代から90年代にかけて社会史的発想による義和団理解の試みが展開されることになったということだが、このことは「評価論」の消長ともリンクする。このような研究潮流の中では「評価論」において「落後」とされた諸側面にこそ意味が求められるからだ⁽⁵⁾。こういった傾向の研究としては例えば張鳴「義和団儀式与文化象徵与政治隱喻」を挙げることができる。その議論は次のようなものだ。義和団は高度に儀式化された集団であり、活動には常に儀式が付いて回る。その儀式の来源は北方郷村の巫術、宗教儀式、民間戯劇等であり、義和団が明確な組織なく短期間に広範な影響力を持ち得たのはしたがって、彼等が当該地域に根ざす迷信や巫術を基礎としたからである——。ここに見られる観点は例えばエシェリック等が以前から取り入れているものであり⁽⁶⁾、その意味では新しさを感じさせるものではない。

また、各分会参加者の話を聞く限り、「義和団運動的社会文化、背景」分会は今回設定された分会のうち、最も不人気であったようだ。そうであれば、次のように理解すべきかも知れない。つまり、義和団研究においては方法の多様化、関心の拡大を求める意志は存在するし、実際、研究はその方向で進みつつあるのだが、現段階においては質量とも十分とはいえない——。ではどのようなテーマが参加者の関心を集めたのかというと、それは「義和団運動与教会、教案」関係であった。

(2) キリスト教をめぐる関心について

教会・教案関係の報告は分会12本、全体会1本で、そこには外国人研究者による報告が5本含まれていたが、それらのいくつかは中国における研究成果に対する挑発的な議論を含んでいたと考えられる。例えば、バステッド（M.B.Bastid）「義和団運動前後直隸省的天主教民」は、これまで使われてこなかったフランス側の檔案史料によって近代中国のカトリックに関する定説を否定すると同時に、義和団の反封建性、反西洋性、反帝国主義性を問い直すというものだ。またコーエン（P.A.Cohen）「義和団、基督教徒和神」は、義和団運動の捉え方自体を問題とする。彼によればそれは、19世紀的価値観が描いた「野蛮」と「文明」の戦いでもないし、20世紀マルクス主義者が描いた「帝国主義」と「愛国主義」の戦いでもない。当事者たちは双方ともこの闘争を徹底的に宗教的な事柄として理解していた、つまり、義和団運動は宗教戦争であったとするのである。一方中国側の報告にも、教案と義和団の関係について、従来の理解は単純に過ぎると考える議論が見られる。例えば王守中「山東教案与義和団散編」は社会経済史的背景、社会心理的要因、また、カトリックとプロテスタントの差異等、取り組まなければならない問題が多方面にわたって存在することを示唆したものである。

さて、大きな関心を集めたこの分野ではあったが、その割に議論は淡々と進んだ、というのが少なくとも日本人研究者たちの捉え方であった。そして、それは王報告に見られるような中国側のスタンスがそうさせただけでも、外国人研究者による史料的裏付けが圧倒的だったことがそうさせたのでも、おそらくなかった。その要因は、ちょうどこの会議の直前に取りざたされた義和団殉教宣教師の列聖問題にあると見てよいだろう。ローマ法王庁は義和団期に死亡した西洋人宣教師はじめ、中国で布教中に死亡した西洋人宣教師を「聖人」に列することを決定し、中国政府はこれに対し強い反発を示していたのである。このとき中国側の研究者たちはまさに「“優劣、是非”がはっきりしている中でそれとは別に“重要なこと”を同時に示さなければならない」状況に置かれて息を潜めたのではないだろうか⁽⁷⁾。

IV. 「義和団運動与世界」について

(1) いくつかの報告

私は基本的には「義和団運動与世界」分会に参加していた。これまで清末中国の政治外交史あるいは欧米・日本の近代中国イメージに関わる問題に関心を寄せてきたからである。したがって、立ち入った話ができるとすればこの領域についてということになるだろう。ただ、このことは同時に、以下に取り上げる報告とそれに対するコメントが主に筆者の個人的関心に基づくことをも意味することになるのだが――。

まず、この個別テーマだが、ここから自分自身留意すべきいくつかのポイントを想定することは難しいことではなかった。例えばそれは、理論的な問題としては世界システム論、オリエンタリズム批判、ポストコロニアル批評、そして、アジア域圏の発想といった近20年来の成果と義和団研究の関わりであり、技術的なことでいえば中国内外における史料公開の進展が義和団と当該時期の中

国イメージにどのように反映されるのかといったこと等々であった。

こうした関心からサマリー集をながめ、そして、報告会場に足を運んだのだが、結論的にいうと、筆者の個人的関心が充たされることはほとんどなかったといわなければならない。例えば、劉明翰「義和団運動与19世紀末亜州民族運動的比較」は、それぞれの地域を無関係に孤立した地域として分析して、相互の関連を全く顧みないし、その結論は「比較」とは無関係に提示しうる従来の議論であった⁽⁸⁾。そして、個人的関心からいえば、そこに世界システム論やそれをベースにした環大西洋革命論⁽⁹⁾にみられる発想を取り入れることはできないかということになるし、前近代以来のアジア域圏の存在を意識した場合、全体としてどのような像を結ぶことになるのか、ということになるのである。もちろん、「言うは易し……」ということとは承知しているが。

次に取り上げる報告は、「評価論」がらみのものであり、具体的には「近代化」路線がどのような形で研究に反映されているかということに関わるものである。郭双林「晚清駐外公使与義和団」は、駐外公使を、近代世界と国際法を理解した「新型知識」人であり、近代国際法の文脈で中国を救おうとしたとする。郭は「反帝」の観点から「売国」とされがちな彼等をこの点において免罪しようとするのである。このような方法が洋務運動の再評価と同じ発想に支えられていることは明らかで、それはすなわち「近代化」路線を意識したものである。そして、報告において史料的な議論がされていない以上、政治的路线の変更に対応して結論を読み替えたと理解せざるを得ないといえよう。こういったタイプの報告は他にも見られたが⁽¹⁰⁾、なぜこういうことになるのか。政治的路线の揺れが研究の結論を規定するような状況が長かったことが、研究のスタイルや幅を狭めてしまっているのだろうか。まるで、新たな路線変更を

前提としていて、そのために労を惜しんでいるかのようにさえ思えてしまうのである。仮に彼等が「近代的」知識人だったとして、彼等はその時いかなる世界観を形成しているのか、その中で日本、朝鮮はどう位置付き、中国はどう位置付いているのか¹¹⁾。こういった問題と向き合ってはじめて「中国型近代的新知識人」像が浮かび上がるのではないだろうか。

この部会で最も関心が集中したのはドイツ公使殺害事件で、3人がこの問題に関して発言を行った。王林「1900年德国在华公使克林德被殺真相」は中国側の史料のみに依拠したもので、かつ、第一檔案館の史料を用いておらず、従来の説の域を出ない。Martin.Bevud「克林德被殺事件」はドイツ側の史料のみを用いた研究であり、従って両者の議論はかみ合わないということになるわけだが、孔祥吉「德国檔案中有關義和団の新史料」はこの両者の問題点を浮き彫りにすることになった。ドイツは八カ国連合軍の掠奪以前に大量の文物を持ち帰っており、孔報告はそれらをドイツの檔案館に尋ねたレポートである。例えば未公刊外交文書、中国国内では見られない義和団の掲帳等の存在が紹介されたが、その中にはドイツ公使殺害に関するドイツ側の史料も大量に含まれており、それを第一檔案館の史料とつぎ合わせるとこの事件が偶然ではない、つまり清朝守旧派の動きが背景に存在したということが明らかになるというのである。また、ドイツ側史料は「帝国主義」がこの事件をどのように利用したかという観点からも有効であるとした。孔報告は外交史研究の「当たり前」をきちんとこなしているというだけで異彩を放ったのである。

(2) 中国イメージ—自身のテーマとの関連から—

関捷「義和団運動時期俄国对旅大地区的侵掠」はロシアの旅順・大連統治について詳説を試みたものだ。特徴は、軍事的経済的侵略の他、文化的

な侵略を重視している点にある。例えば、ロシアは「俄清学校」「医療」「慈善会」「孤児院」を通じて「推行文化政策、愚弄中国人」というような議論が示され、関捷は、それを非常に強い論調で非難することに努めるのである。筆者がこれに興味を持ったのは、ここに描かれるロシアイメージと当該時期日本が描いたそれがかけ離れているからだ。例えば、『東亜同文会報告』に見られる1900年後半以降のロシアは暴虐の限りを尽くしているのである。このギャップをどのように考えればよいのだろうか。一つには、次のような議論をふまえてロシア側の問題を考えるということがあり得るだろう。すなわち、「東洋としてのロシア」と「ヨーロッパになりたいロシア」の狭間で、ロシアには「特殊な東洋蔑視」の伝統（「ロシアのオリエンタリズム」）が流れているという観点である¹²⁾。もう一つは日本側、特に東亜同文会が描く自己イメージの問題だ。東亜同文会は自身と日本を中国文明化の主体として位置付けなければならなかったし、その役割を崇高なものにしなければならなかった。そうであれば「ロシアの蛮行に苦しめられる中国」というイメージが、そこに「救いをさしのべる日本」の役割を際立たせるために強調されたとしても不思議ではないからだ。そして、近代における自己イメージ・他者イメージの創出に関わるこの観点は以下の報告を扱う際にも有効と考えられるのである¹³⁾。

謝敏美「近衛篤磨的侵略思想及其活動述略」は近衛篤磨の言動を侵略的なものとして位置付けることをはじめから目的とする。謝によれば「鎮護極東」、「東亜同文会」、「保全中国」、「黄種人同盟論」、「扶掖朝鮮論」等の言動は全て、中国・朝鮮の内憂外患を利用して親日勢力を培養するためなのである。

また、J.E.Elliott, Cartoons of Boxer War ; China, the Conscience of Civilised World. はスライドを用いつつ、世紀転換期ヨーロッパの風刺画は巨大な影響

力をもっていたという前提に立つて次のように述べる。義和団を扱った風刺画家達は義和団を中国の野蛮性という文脈では描かなかった。むしろ、彼等は列国による中国侵略こそ非人間的、非文明的、非キリスト教的であるというメッセージを発信した――。つまりエリオットは風刺画の中に「文明世界」の「良心」を見出し、その存在を強調するのである。

この二つの報告は共にいわゆる帝国主義側の言説を取り上げ、一方はそれを侵略的として断罪し、一方はそこにも良心の存在を見出しその意味においてそれを免罪する。しかし、このどちらにも、それぞれ全く別の側面があったことはすでに指摘されている。我々は、近衛篤磨や東亜同文会、あるいは欧米のメディアについて、それが侵略的であったか否か、ということを論ずることとは別の問題を設定する必要があるのだ。そこには侵略的であったか否かに関わらず、中国を指導の対象、文明化の対象として捉える「まなざし」が共有されており、我々は現在も同じように中国を「まなざす」ことをやめているとは言い切れないからだ。そして、このように考えるならば、あからさまな侵略的意図よりもむしろ、「良心」が問題とされるべきなのである。この時期の「良心」については例えば、社会主義運動、アメリカ反帝国主義運動、J・コンラッド『闇の奥』（1899年）、H・G・ウェルズ『宇宙戦争』（1898年）などを思い起こせば、それが存在したことは自明だろう⁹⁴。また、東亜同文会員たちの「使命感」に「良心」見出すことも難しいことではない。それが問題となるのは、「良心」はそこに、指導の対象、文明化の対象としての中国イメージが内在するという問題を隠蔽するし、「良心」の行為が成立するためには指導の対象、文明化の対象として中国イメージが不可欠だからだ⁹⁵。こうして、我々は、冒頭に示した問題に立ち返ることになるのである。

V. おわりに

威県行きのバスが出発したのは討論が全て終了した翌早朝、昼には到着したから、それはバスで4時間くらいの行程であったろう。10年前と比べると道路事情の差は歴然としていた。到着後の動きは前回とほぼ同じで、それは、義和団ゆかりの地を訪ね、県主催の宴会に参加し、当地に伝わる拳法の演舞を参観するというものであった。ただし、威県は変わっていた。県政府前の大通りはすっかり「メインストリート」だったし、「ゆかりの地」を囲む村々には新しく建てられたコンクリートの白い建物がしばしばその存在感を示していた。子供たちの服装は小綺麗で、演舞の迫力と観客の様子についてもそれはある種の肩すかしを思わせるものであった。つまりそこは、全てが薄茶色くくすみ、演舞が熱狂的空間を生みだしていた10年前の威県ではなかった⁹⁶。そして、私はそれを「おもしろくない」と感じたのである。

威県の変化を「おもしろくない」と捉える感性の存在については何人かの同行した研究者にも確認したし、帰国後、辛亥革命研究会で行った報告のなかでもこの件に触れたが、参加者のなかには自身にこのような感性を見出した者もあったように見受けられた。ここでまず思い起こさなければならぬのは冒頭に示した問題、すなわち、「まなざす」対象のイメージを「あるべき」の枠の中に閉じこめてしまうという問題だろう。それが科学に由来するのか、それともセンチメンタリズムなのかに関わらず、我々にはそれぞれ「こうあって欲しい中国」が存在していて、威県の変容はそれにそぐわなかったのだ。そして、近代において「文明化の使命」が「遅れた存在としての中国」を求めてやまなかったとすれば、我々が「変わらない威県」を求めるのはなぜなのかという問題を取り上げざるを得ないのである。また、こういうことを考えてみる必要もあるのではないか。つま

り「威県」を「中国側の研究」に置き換えて考えてみるということだ。そうすると、そもそも、中国側の研究を我々はどのように「まなざし」しているのかということから問題となる。それはすなわち「こうあって欲しい中国の一部を構成するもの」として「まなざす」のか、あるいは、我々と同じように「中国をまなざす主体の一部分」として捉えるのか、という問題に他ならない。例えば、私はこの文章の中で、私自身が関心を有するいくつかの方法論を以て外在的に中国側の研究を批判してきた。ここでは、中国側の研究は「中国をまなざす主体の一部分」ということになる¹⁰⁾。しかし、一方では、中国側の研究の在り方から現代中国を展望しているのである。この場合中国側の研究は「外国人にまなざされる中国の構成要素」として「威県」と互換性を持つことになるのである。そうであれば、中国側の研究の在り方は「変わって」はいけないのであり、しかも同時にそれは「変わっていない」ということを以て批判されることになるのだ――。

そこではすなわち、自分自身があの経済援助を申し出た団体や東亜同文会と同じような意味でイメージの閉じこめを行う一方で、同時に、そのイメージから抜け出せないことを以て対象を批判しているということになるのであり¹¹⁾、そして、もしもこの矛盾を抱えているのが私だけではないとしたら、それはこのことが、例えば中国を対象とするような日本の研究者にとって避けては通れない問題であるということの意味するのである。

[注]

- (1) 27名の内訳は以下の通り。台湾1, アメリカ4, イギリス1, フランス1, ドイツ4, オーストリア1, イスラエル1, ロシア1, 日本10, 韓国3。ちなみに香港からは5人の研究者が参加（「会議手冊」及び拙稿「義和団運動“評価”論とその周辺」『中国研究月報』第513号1990年）。
- (2) 小林一美「義和団運動評価の思想」, 佐藤公彦「義和団“評価”論争をめぐって」（『中国研究月報』第398号1981年）。
- (3) 小林一美『義和団戦争と明治国家』汲古書院1986年123～125頁参照。
- (4) 李莉「口述史料与義和団研究」。調査・研究に対する時代性・歴史認識の問題, 口述調査と研究の関係, 文学史料と口述調査の優劣, 口述調査の必要性等を論じたもの。文学作品を史料としたものとして蒋英豪『「人境廬詩草」与庚子事变』。黄遵憲の詩集に注目している。全11巻中ちょうど2巻分を義和団関係の作品が占めているという。一方で、「扶清滅洋」「興清滅洋」のスローガン, 「刀槍不入」の儀式がいつどこで登場するのかという観点から文書史料を追いつめる従来タイプの研究としては, 王如絵「論義和団運動起源の三個階段」がその典型といえるだろう。
- (5) このような発想は80年には全く希であったという（佐藤公彦前提レポート）。一方で, 義和団の蒙昧性, 後進性を以て反近代的と位置付ける発想も根強い（王守中「山東教案与義和団散論」, 牛敬忠「近代綏遠地区的民教衝突」サマリー等）。
- (6) J. W. エシェリック「義和団の文化的前提～教派・武術・民衆文化～」(『アジアから考える<5> 近代化像』東大出版1994年)。“集団心態”(mentality collective), 市場圏といった発想を用いた報告として馬場毅「義和団的諸神与農民的日常生活」。また, 馬場は“降神附体”の諸神に関する従来の研究が「封神演義」「三国志演義」「西遊記」等小説, 戯劇に注目してきたことに対し, そうであれば「評書」の持つ意味が重視されるべきとする。文盲率の問題を考慮しなければならないからだ。
- (7) 私は辛亥革命研究会の例会でこの「義和団討論会」についての報告を行ったが, この部分に

についてはその場での佐藤公彦氏の示唆によるところが大きい。

- (8) 劉はアジア各地の「主要」な「民族運動」をとりあげ共通点、相違点を列举し、義和団の特質と限界を指摘する。共通点は宗教的色彩が濃く、不平等条約下の出来事であること。相違点は「指揮中枢」の有無、何カ国に鎮圧されたか、運動の規模、ブルジョワ参加の有無ということになる。そして、結論は、義和団運動は反帝、愛国とその影響という点で巨大な意義を持つが清朝に利用され、闇雲な排外主義をかざし、明確な闘争の理論を持たなかった点において限界をみるべきというもの。
- (9) 川北稔「環大西洋革命の時代」(『岩波講座世界歴史17環大西洋革命』岩波書店1998年) 参照。
- (10) 同じ様な傾向が顕著な報告として田濤「世紀之交中国知識界の国際観念」。
- (11) 例えば佐藤慎一『近代中国の知識人と文明』(東大出版1996年) やシュウォツルの議論とどのように関わるのか、坂野正高『中国近代化と馬建忠』(東大出版1985年) が示した対欧米用世界観と対アジア用世界観のダブル・スタンダードをどのように考えるのかということではないか。
- (12) カルパナ・サーヘニー、松井秀和訳『ロシアのオリエンタリズム』柏書房2000年、17、23頁。
- (13) Tim Trampedach「“黄禍”？ 德国世論与義和団運動」はこのような問題を扱った報告。黄禍

論を一種のオリエンタリズムとして捉え、中国を魔物として描く感性が現代欧米の中国脅威論にも脈づいているとする(サマリーより)。

- (14) 丹治愛『ドラキュラの世紀末』(東大出版1998年)、同『神を殺した男』(講談社メチエ1994年)、第4章参照。
- (15) 私自身の報告は概ねこのような発想に基づいて東亜同文会の「中国保全論」が前提とするオリエンタリズムを分析したもの。「中国保全論の東方主義与義和団時期中国之形象」。
- (16) 10年前の様子については前掲拙稿。
- (17) 小林一美氏はその報告が、日本の侵略を肯定するものとして中国側の批判を受けると、「まずは私の著作を読むべきだ」と対応する。この時、中国側の研究は「中国をまなざす主体の一部」である。また、この場面は中国側がにわかにその政治性をあらわにしたという意味でも印象的であった。
- (18) こういった発想については、レイ・チョウ(本橋哲也訳)『ディアスポラの知識人』(青土社1998年) に示唆を受けた。

〈付記〉

今回の学会では、簡単なサマリー以外にペーパーが配付されておらず、直接報告を見聞きしたものについてはともかく、資料を頼りに論じたものについては、誤解があるかも知れない。この点については御了承いただきたい。

(資料)

提 交 論 著 目 録

著 作		
題 目	作 者	出 版 社
義和団研究100年	中国義和団研究会編 蘇位智、劉天路主編	齊魯書社
山東大学義和団調査資料彙編	路遥主編 陸景琪、蘇位智、劉天路副主編	山東大学出版社

山東大学義和团調查資料彙編	路遥主編 陸景琪，蘇位智，劉天路副主編	山東大学出版社
山東民間秘密教門	路遥著	当代中国出版社
義和团平原起義100周年學術討論會 論文集	楊文平，李德征主編 王如繪，蘇位智，劉天路副主編	齊路書社
山東教案与義和团	王守中著	中国文聯出版社
義和团抵抗列強瓜分史	牟安世著	經濟管理出版社
拳民与教民——世紀之交的民衆心態 解談	張鳴，許蕾著	九州圖書出版社
鉄血百年祭	孫其海著	黄河出版社
義和团運動和八国聯軍侵華戰爭 (図文集)	施玉林編著	(日) 雛忠会館 株式会社
庚子之变図誌	趙健莉	山東画報出版社

論 文		
題 目	作 者	工 作 單 位
義和团百年研究學術成果攬要	馬洪林 閻丹紅	上海師大歷史系
文本伝統与田野調査：中国民間宗教研究百年 回顧	王慶德	南京大学民間社会研究中心
山東教安与義和团散論	王守中	山東師範大学歴史系
山西義和团運動的特点	王守恩	山西大学歴史系
論義和团運動起源的三個段階	王如繪	山東省社科院歴史所
1900年德国駐華公使克林德被殺真相	王 林	山東師範大学歴史系
義和团運動在日本的反響	王曉秋	北京大学歴史系
近代綏遠地区的民教衝突	牛敬忠	內蒙古大学歴史系
德国檔案中有關義和团的新鮮史料	孔祥吉	哈仏大学訪問学者
世紀之交中国知識界的国際觀念	田 涛	天津師範大学歴史系
論辛丑議和中的“懲凶”問題	田海林 王 林	山東師範大学歴史系
中西文化衝突与直隸義和团運動的興起	成曉軍 範鉄權	河北大学歴史系
從迎神賽社看近代山西民教衝突	行 竜 趙英霞	山西大学歴史系
試論義和团運動的兩重性	莊鴻鏘	新疆大学歴史系
義和团運動与晚清鄉村社会控制	劉天路	山東大学歴史文化学院
義和团運動与19世紀末亞洲民族運動的比較	劉明翰	中国青年政治学院
簡議上海庚子時論中的東南意識	劉学照	華東師大歴史系

義和團運動時期俄国对旅大地区的侵掠	閔 捷 楊惠萍	大連民族学院 大連大学文史学院
從二十四頃地教案日期的分歧看教会史料的局限	米辰峰	中国人民大学歷史系
世紀之交的直隸：災荒与流民	池子華 李紅英	河北大学歷史系
論晚清反教“滅洋”的社会風潮	安靜波	哈爾濱師大歷史系
百年来義和團運動研究的再審視	孫占元	山東師範大学歷史系
八国聯軍侵華戰爭三題	蘇位智	山東大学圖書館
中国這樣走進20世紀	李文海 趙曉華	中国人民大学 北京出版社
庚子（1900）廣東教案述略	李吉奎	中山大學歷史系
朱紅灯与平原起義余論	李宏生	山東師大歷史系
德占時期青島的城市建設	李 岫	青島大学國際商学院
趙三多及義和拳運動散議	李金鵬	河北省威県人大常委会
義和團運動与不平等条約	李育民	湖南師大歷史系
口述史料与義和團研究	李 莉	山東大学歷史文化学院研究生
欧中關係：從帝国主義論到發展權原則	李道剛	山東大学外国語学院
試論義和團運動特点及其与中国近代化	吳士英	山東大学歷史文化学院
庚子事變与近代中国外交思想的形成	吳宝曉	河北師範大学歷史系
19世紀末魯西南地方權力結構与教案	宋桂英	山東大学歷史文化学院研究生
從帝国到民主国家：一個晚清村莊的衝突，控制与自治	張広生	中国人民大学博士生
試析庚子戰前袁世凱对教案的態度	張華騰	安陽師院政史系
再說《神助拳，義和團》揭帖	張守常	北京師範大学歷史系
義和團儀式的文化象徵与政治隱喻	張 鳴	中国人民大学思政文化研究所
論山東義和團抗擊袁世凱的“剿滅”鬭爭及其特点	陸景琪 陸漁帆	山東大学
義和團運動時期山東和北京的伝教士	陳月清	中国青年政治学院
義和團運動時期的朱祖謀	陳可畏	浙江師大歷史系
庚子国難百年記念与反思	陳振江	南開大学歷史系
有関八国聯軍戰爭的幾個問題	林華国	北京大学歷史系
義和團運動時期慈禧太后心態剖析	欧陽躍峰	安徽師大歷史系
從異端走入正統的“子不語”：庚子義和團事件表現出来的歷史轉折	羅志田	四川大学歷史系
梅花拳拳理功法的歷史尋繹	周偉良	西安体院武術系
己亥建儲与義和團運動	周育民	上海師大歷史系
義和團向城市發展的推動力試論	周俊旗	天津社会科学院歷史所

義和團運動時期河南省河北道籌防局個案研究	鄭永福 呂美頤	鄭州大學歷史系
義和團的“洋人”觀	宝成閔	吉林大學行政學院
論甲午戰後至辛丑間中国社会的主要矛盾	趙春晨	廣州大學歷史系
晚清教案發展階段新探	趙樹好	聊城師院歷史系
百年的啓迪	姜 涛	中國社科院近代史研究所
近代中國保教權問題	顧衛民	上海教育學院歷史系
簡議趙三多把“梅花拳”改名“義和拳”的策略思想	顧自忠	河北省威縣政府
洋票案：20世紀初一種新式教案之初探	徐有威	上海中國紡績大學社科系
論己亥建儲與義和團運動	徐松榮	廣東社科院歷史所
李鴻章與庚子議和	翁 飛	中國人民大學清史所博士生
義和團運動與近代中國愛國主義論綱	郭大松	山東師範大學歷史系
梁啟超與義和團運動二題	郭世佑	浙江大學歷史系
晚清駐外公使與義和團運動	郭双林	中國人民大學歷史系
	陶飛亞	山東大學歷史文化學院
趙三多伝略	黃成俊 潘明輝	河北省威縣政協
清政府與義和團運動	戚其章	山東省社科院歷史所
如何看待中國近代史上的教案	章開沅 劉家峰	華中師範大學歷史研究所
簡論義和團運動與山東“新政”	商鳴臣	山東大學歷史文化學院
義和團運動與清末政治體制的近代化	梁巖冰	陝西延安大學歷史系
庚子教案的積留和“善後”處置	董叢林	河北師範大學歷史系
東直督撫與義和團運動的興起	喻大華	遼寧師大歷史系
社區精英群的聯合和行動	程 歆	中國人民大學思政文化研究所
近衛篤磨侵略思想及其活動述略	謝俊美	華東師大歷史系
山東大學義和團調查述評	路 遙	山東大學歷史文化學院
義和團運動若干特點芻議	黎仁凱	河北大學歷史系
地方督撫與清政府對義和團政策的變化	冀滿紅 白文剛	山西大學歷史系
清政府對抗擊八國聯軍決策的歷史作用	魏文華	新華社山東分社
晚清教案與反教思想研究述評	福 增	香港建道神學院
一九〇〇年(義和團事件)前後的中国基督教教育	吳梓明	香港中文大學
義和團運動與山東基督教	梁元生	香港中文大學
入境廬詩與庚子事變	蔣英豪	香港中文大學
重回庚子年	魏外揚	台灣中原大學

義和團運動与基督教：加速中国基督教本色化及其背景	任 達	美国佐治亚州立大学
義和團，基督教徒和神——論1900年義和團鬭爭是一場宗教戰爭	柯 文	美国哈佛大学
天主教出版物和宗教戲劇对義和團和中国基督教徒的描繪	魏揚波	美国学者
大刀会与義和團運動的關係	狄德滿	英国倫敦大学
義和團運動前後直隸省的天主教民	巴斯蒂	法国国立科学研究院
克林德被殺事件	伯恩·馬丁	德国弗賴堡大学
宗教衝突：義和團起義之后德国传教士和山東地方社会的相互作用	余凱思	德国伯林自由大学
德国公衆的觀點与中国義和團運動：“黃禍”觀念的形成	蒂 姆	德国伯林自由大学
義和團戰爭的卡通与文明世界的良心	金 莹	澳大利亞学者
也談義和團起因說的研究	謝愛倫	以色列特拉維夫大学
俄蘇学者对中国義和團運動研究述評	博克沙寧	俄羅斯科学院
關於義和團時期孫中山依靠外国勢力的政策及義和團評價問題	久保田文次	日本女子大学
中国保全論的東方主義与義和團時期中国之形象	久保田善丈	日本神田外国語大学
有関義和團運動，義和團戰爭的四個問題	小林一美	日本神奈川大学
義和團的神与農民的日常生活	馬場毅	日本愛知大学
天津義和團運動与地方社会的記憶	吉澤誠一郎	日本東京外国語大学
清朝為什麼決断“宣戰”	佐藤公彦	日本東京外国語大学
1910年的長沙米騷動与会党	藤谷浩悦	日本東京女学館短期大学
清末中国民衆的对外理論變化	金希教	韓國光雲大学
義和團運動以前山東地区反教会活動的興起以及展開狀況	金鐘健	韓國慶北大学